



宮城県気仙沼市

株式会社

サンフレッシュ小泉農園

(編集部)

海辺の気仙沼市

水産業の町、宮城県気仙沼市。この地で施設面積2ha、県内最大規模を誇る施設トマトを展開するのは株式会社サンフレッシュ小泉農園さんです。イメージキャラクター「とまとん」は颯爽とサーフィンを操る波乗りトマトのイメージ。施設の目前に広がる小泉海岸は東北有数のサーフスポットでもあります。しかし、この地も津波の被害を受けてしまいました。「事業と地域の復興が波に乗るように」ととまとんにはそんな地域の願いがこもっています。

中山間地の難しさ

平成27年9月に落成したサンフレッシュ小泉農園さん。代表取締役の今野圭市さんに、県内最大規模のトマト栽培施設がスタートした経緯からお話を伺いました。

「実は震災前からこうした園芸団地構想は出ていました」

震災発生の3年前。平成10年代の後半は建設業界が冷え込み、農業への転換を図りだしたところ。建設会社経営者の肩書ももつ今野さんは、井関農機さんの紹介で福島県いわき市にあったトマト施設を泊り込みで見学したそうです。地元で事業の可能性を模索したも

の、それだけの規模の面積が用意できず、現在土地を借りている17名の地権者数人に借地の相談を持ちかけましたが、当時はまったく理解されなかったそうです。

「我が家もいわゆる三反百姓でした。1000万の農機具を買って、車庫を建てて、乾燥施設作っていたら採算なんて取れない。いっそのことそのお金で蔵立てて100年分の米を買って貯えた方がましだと親父に言った覚えがあります」

今でこそ笑って話す今野さんでしたが、小規模な経営では将来はないと感じていました。

「この南三陸町地域は海が近い中山間地で、3000㎡程度の小規模農地が点在し専業が成り立たない地域でした。兼業農家が9割以上を占めています」
同席いただいた南三陸農業協同組合営農生活部農業復興担当の木村健一さんに地域の特徴を説明いただきました。

実現に加速した大規模園芸施設構想

そして震災の発生。当地を襲った高さ26mの津波はすべての様相を一変させました。

「まるで一面太平洋、何が何かわからない。水が引いても海水に浸かった

田んぼは塩害で使い物にならなくなっちゃった」

こうした状況下、気仙沼市に三菱商事さんから「大型ハウスをやりませんか」と提案があったそうです。市役所からすぐ今野さんに声がかかりました。「たいした知識もなかったけど、見学もしていたからトマトなら六次産業化もできるんじゃないのって提案したら話が一気に加速して」

気仙沼市が17名の地権者に声をかけ土地の貸し出しを提案したら30分で賛同してくれたそうです。

「だって鎌も長靴も何もかもさらわれて。うちだって子どもにも農業継がせようと思っていなかったところにこの災害。みんなふんざりがついたので思うよ。好きに使ってくれと」

1年ごとが勝負

事業計画のスタートから3年は井関さんを中心に市のサポートも得てプロジェクトが具体化しました。資金面は国、県、市の補助金や低金利の公庫などを活用。税制面でも5年間農業特区に指定されました。そうして10億円規模のプロジェクトは平成25年に始動し、26年に株式会社サンフレッシュ小泉農園法人が設立、全農みやぎさんと井関農機さんの入札でトマト養液栽培施設

東日本大震災から8年。 次世代農業はもう始まっている



↑栽培現場を託された渡邊さん。



↑2 haの面積がある施設内。左から木村さん、今野さん、渡邊さん。



↑オランダ式のハイワイヤーロックウール養液栽培。



←↑畝ごとの管理責任を明確にし、作業ラインを見直すことで効率化が進んだ。



↑「桃太郎ネクスト」はスタミナがあり長期栽培での秀品率が向上した。

の建設が着工。平成28年に栽培がスタート。品種は井関さんや仙台市場がすすめた「桃太郎」系の大玉トマトを4品種ほど栽培。施設の受け渡しが遅れたものの10 a当たり22 t、1億3000万の収益を得ました。

2年目は1作目の結果を受けて「CF桃太郎はるか」に統一して10 a当たり27 t、1億8000万を売り上げたそうです。一見、順調に推移しているように感じましたが今野さんにはそうは見えていませんでした。というのも10億円の借り入れは、金利の返済だけでも大変なもの。特区指定も5年間の期限があります。経営面から見れば少しも満足できる数字ではないのです。社員4名、30名のパートさんの生活を確立するためにも1日も早く経営を軌

道に乗せたいと今野さん。パートさんの中にはまだ仮設住宅から通う方もいます。思いは木村さんも同じです。「このプロジェクトがモデルケースとして成功をしてほしい、地域復興の中心となってほしい」と、大きな期待が集まっているからです。

若いスタッフを信じて

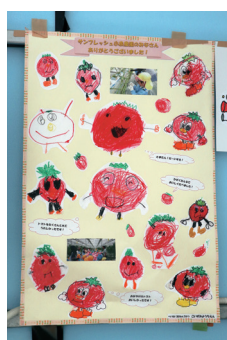
そして次作は、今年成績のよかった「桃太郎ネクスト」へ品種が変更されました。

の責任者に若い女性スタッフの渡邊春日美さんを抜擢。農業経験があったわけではない渡邊さんですが、2年間うまくいかなかった作業ラインを見直して、ハウス内の担当を明確化。作業効率が向上し遅れ気味だった管理作業はスムーズになりました。効果は「グロ―バルGAP」取得という形で現れました。

渡邊さんら若いスタッフも育てて行くという今野さん。地域の復興を担うのは、地元で育った若い世代だという願いを強く感じました。



↑工事中の津谷川湾岸護岸工事とハウスの間には太陽光パネル施設の建設が進む。



↑ハウスを見学に来た地元の小学生にも人気だった「とまとん」。



↑このプロジェクトを成功させるために木村さんも熱がこもる。